

反芻と被拒絶場面における拒絶予期および 拒絶知覚の関連

村山 由佳 梅津 千佳 富田 望 南出 歩美
武井 友紀 熊野 宏昭 早稲田大学

Relationship between the expectation of and perceptions related to rejection and rumination

Yuka MURAYAMA, Chika UMEZU, Nozomi TOMITA, Ayumi MINAMIDE, Yuki TAKEI,
and Hiroaki KUMANO (*Waseda University*)

It has been suggested that the higher the expectation of rejection, the more strongly one is likely to perceive any given interpersonal interaction as rejection (Suyama, 2016). We consider the possibility that rumination is associated with the expectation of and perceptions related to rejection; however, this potential connection has not been directly examined. In this study, we explored the relationship between rumination and expectations and perceptions of rejection. Our results of correlation analysis revealed that those who tend to ruminate are more likely to anticipate rejection in response to an otherwise ambiguous event when the experience of the rejected has accumulated. In the future, it will be necessary to determine whether similar results can be obtained by intervention to limit rumination.

Key words: expectation of rejection, perception of rejection, rumination

Waseda Journal of Clinical Psychology
2020, Vol. 20, No. 1, pp. 13 - 19

拒絶過敏性とは、拒絶を予期し、すぐに知覚し、過剰に反応する傾向であり (Downey & Feldman, 1996)、パーソナリティ特性の一つであると考えられている (Ayduk, Downey, & Kim, 2001)。また、他者からの拒絶を主観的に知覚した程度を反映しているとされている (岡田・中山, 2008)。拒絶過敏性が高いと、相手の言動や態度に拒絶のサインを検出しやすく (Levy, Ayduk, & Downey, 2001)、抑うつや不安、境界性パーソナリティ障害など、様々な精神疾患の発症との関連性が指摘されている (Gao, Assink, Cipriani, & Lin, 2017)。このことから、拒絶過敏性が高い者は、被拒絶場面において対人ストレスを感じやすく、拒絶に関する非適応的な認知によって、様々な精神疾患の発症リスクを高めていると考えられる。

拒絶過敏性が高い者の被拒絶体験における認知プロセスを説明するモデルとして、Rejection sensitivity model が提唱されている (Levy et al., 2001)。このモデルでは、拒絶過敏性が高いと、拒絶される可能性のある場面で拒絶されるだろうという予期が高まり、拒絶を知覚しやすくなり、拒絶を強く知覚するほど、その拒絶の程度にかかわらず、ネガティブな気分反応が高まるとさ

れている (巢山, 2016)。さらに、拒絶を強く知覚するほど、次の被拒絶場面における予期が高まるという循環プロセスが明らかにされている (巢山, 2016)。また、拒絶過敏性が高い者は、拒絶される状況を想定し、明確に拒絶されていない曖昧な状況に対しても「拒絶された」と否定的に解釈することが多く、その解釈にまつわる思考が持続し、やがて自動的になり、曖昧な状況に直面した際に、その否定的な解釈によって拒絶に対する予期が生起すると考えられている (Normansell & Wisco, 2017)。拒絶に対する予期の生起要因である、拒絶されたことに対する否定的な解釈についての持続的、かつ自動的な思考は、過去の体験を反復的に想起する認知的活動である、反芻と類似していると考えられる。

反芻とは、妨害的な思考に対処しようとする制御困難で反復的な思考スタイルを指し、過去に対する後悔が中心となって起こるとされている (Wells, 2009 熊野・今井・境監訳, 2012)。反芻へのアプローチを取り入れた心理療法の一つであるメタ認知療法 (Metacognitive Therapy: 以下, MCT とする) では、メタ認知的信念によって反芻がトップダウンに選択されると考えられて

いる（熊野，2012）。反芻に対するメタ認知的信念は、反芻することを有益と考えるポジティブなメタ認知的信念と、反芻を制御不能と考える反芻に対するネガティブなメタ認知的信念に分けられる（Wells, 2009 熊野他監訳，2012）。反芻は、反芻に対するポジティブなメタ認知的信念によって生起し、反芻に対するネガティブなメタ認知的信念を誘発するとされている（Wells, 2009 熊野他監訳，2012）。

拒絶過敏性が高い者は反芻をしやすく、反芻は拒絶に関するネガティブな記憶の想起によって引き起こされる可能性があることから（Pearson, Watkins, & Mullan, 2011）、拒絶過敏性が高い者の被拒絶場面における認知プロセスと反芻は、過去の被拒絶体験によって生起する点で類似していると考えられる。そして、巢山（2016）や Normansell & Wisco（2017）の知見より、拒絶過敏性が高い者は、拒絶を知覚した際の否定的な解釈について反芻し、その結果として曖昧な状況に直面した際に拒絶に対する予期が生起し、実際の状況において拒絶を知覚しやすくなるという循環プロセスが想定される。

拒絶過敏性が高い者の、拒絶のサインの検出しやすさによる対人ストレスの生成に対しては、拒絶に対する予期に介入することが効果的である可能性が指摘されているが（巢山，2016）、実際に介入の可能性を示した研究は見当たらず、拒絶に対する予期への介入方法は明らかになっていない。その理由として、Rejection sensitivity modelにおいて、被拒絶体験後の拒絶に対する予期が、どのように高められているかが不明であることが考えられる。拒絶に対する予期の生起要因である、拒絶されたことに対する否定的な解釈についての持続的、かつ自動的な思考（Normansell & Wisco, 2017）を、MCTにおける反芻と捉え、反芻および反芻に対するメタ認知的信念と、被拒絶場面における拒絶に対する知覚および予期との関連を明らかにすることによって、MCTの理論に基づく反芻へのアプローチを用いて、拒絶過敏性が高い者の被拒絶場面における循環プ

ロセスに介入することが可能になると考えられる。

そこで、本研究では、変数間の因果関係を示す前段階として、未だ検討されていない反芻と被拒絶場面における拒絶に対する知覚および予期の関連性について検討することを目的とした。本研究において想定している各変数の関係図を Figure 1 に示す。

方 法

対象者

首都圏近郊の私立大学に通う学生を対象に、実験参加の募集を行い、同意が得られた21名を対象に実験を行った。性別の内訳は、男性7名、女性13名、無回答1名で、平均年齢は 20.38 ± 1.72 歳であった。

実験参加の条件は、24時間以内に薬を服用していないこと、12時間以内に飲酒をしていないこと、日常生活に支障をきたすほどの視覚系の異常を感じていないこと、極度の睡眠不足や疲労を感じていないこと、精神科や心療内科への通院歴を有していないこと、心理療法を受けた経験がないこと、過去1ヶ月間でトラウマティックな出来事を経験し、その出来事を思い出して苦痛を感じることはないこととした。

実験課題

拒絶に対する知覚および予期を測定するために、拒絶を知覚する場面を呈示する課題であるサイバーボール課題（Williams, Cheung, & Choi, 2000）を使用した。この課題では、プログラム上の2人のプレイヤーとキャッチボールを行う。上記の2人のプレイヤーは実在していないものの、実験参加者には2人のプレイヤーは別室に待機していると教示した。

本研究では、サイバーボール課題を5試行を行った。巢山（2016）を参考に、実験参加者にボールが回ってくる割合を、プレイヤー間での受容を示す第1試行および第5試行では33%、第2試行および第4試行では22%、最も強い被拒絶場面を呈示する第3試行では

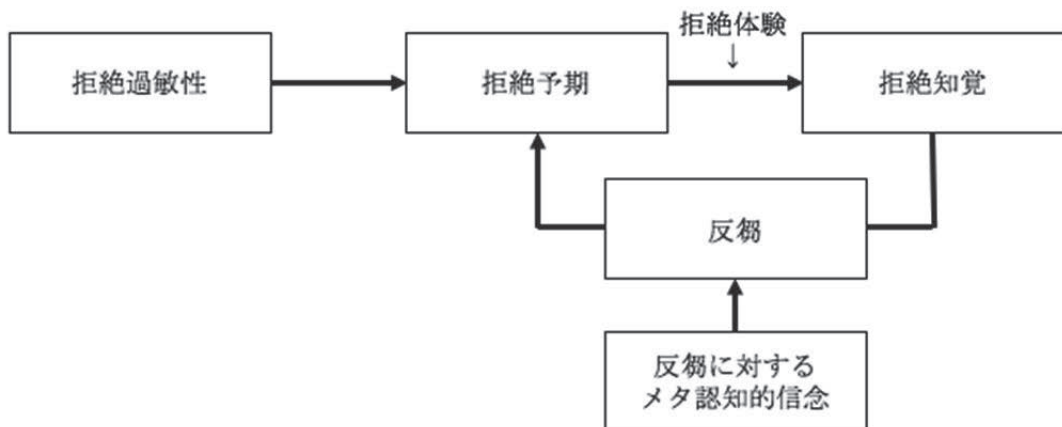


Figure 1 本研究において想定している各変数の関係図。

11%に設定した。上記の設定により、実験参加者は、課題開始後は受容されているが、徐々にボールが回ってこなくなることで拒絶を知覚する。その後は、再度ボールが回ってくるようになるため、他のプレイヤーから受容されたという感覚を抱かせることが可能となる。

質問紙尺度

(1) **健康アンケート**：実験参加者が実験に参加可能かどうかを判断するために使用した。

(2) **フェイスシート**：実験者の性別、年齢を確認するために使用した。

(3) **日本語版 Interpersonal Sensitivity Measure (J-IPSM; 巢山他, 2014)**：拒絶過敏性を測定する尺度であり、「関係破綻の不安」、「他者を傷つける不安による非主張性」、「批判されることへの懸念」、「社会的自己像と真の自己像の不一致」、「他者評価追従」の5因子で構成されている。大学生を対象とした調査において、併存的妥当性、内的整合性が示されている。本研究では、5因子27項目4件法で使用した。得点が高いほど拒絶過敏性を強く保持していることを示す。

(4) **Rumination-Reflection Questionnaire 日本語版 (RRQ; 高野・丹野, 2008)**：適応的・非適応的な反復的思考を測定する尺度であり、「反芻」、「省察」の2つの下位尺度から構成されている。大学生を対象とした調査において、基準関連妥当性、内的整合性が示されている。本研究では、下位尺度「反芻」を、12項目5件法で使用した。得点が高いほど反芻傾向を強く保持していることを示す。

(5) **Positive Beliefs about Rumination Scale 日本語版 (PBRs; 高野・丹野, 2010)**：反芻に対するポジティブなメタ認知的信念を測定する尺度である。大学生を対象とした調査において、収束的妥当性、弁別的妥当性、内的整合性、再検査信頼性が示されている。本研究では、9項目4件法で使用した。得点が高いほど反芻に対するポジティブなメタ認知的信念を強く保持していることを示す。

(6) **Negative Beliefs about Depressive Rumination Questionnaire 日本語版 (NBDRQ; 長谷川・金築・井合・根建, 2011)**：反芻に対するネガティブなメタ認知的信念を測定する尺度である。大学生を対象とした調査において、収束的妥当性、弁別的妥当性、内的整合性、再検査信頼性が示されている。本研究では、15項目5件法で使用した。得点が高いほど反芻に対するネガティブなメタ認知的信念を強く保持していることを示す。

(7) **被拒絶感**：先行研究(巢山, 2016; Kawamoto et al., 2012; Williams et al., 2000)を参考に、「どの程度拒絶されたと感じますか」と尋ね、9件法で回答を求めた。得点が高いほど被拒絶感が高いことを意味する。

(8) **拒絶知覚**：巢山(2016)を参考に、「3人に均等に

ボールが回った時を33%とすると、直前のブロックで、どのくらいの割合であなたにボールが回ってきたと思いますか」と尋ね、0から100の整数で回答を求めた。得点が高いほど拒絶に対する知覚が高いことを意味する。

(9) **拒絶予期**：巢山(2016)を参考に、「3人に均等にボールが回った時を33%とすると、次のブロックで、どのくらいの割合であなたにボールが回ってくると思いますか」と尋ね、0から100の整数で回答を求めた。得点が高いほど拒絶に対する予期が高いことを意味する。

実験手続き

以下の手順で実験を行った。(6)と(7)の手順は各試行で行った。

(1) **実験参加同意の取得**：説明文書を読み上げる形で実験概要を説明し、インフォームド・コンセントを得た。

(2) **健康アンケートへの回答**：健康状態と、実験参加の条件を確認するために回答を求めた。

(3) **質問紙尺度への回答**：フェイスシート、J-IPSM、RRQ、PBRs、NBDRQへの回答を求めた。

(4) **サイバースポーツ課題の説明**：課題を説明する動画をPC上で再生した。動画内にて、「別室に待機している他の実験参加者とオンラインでつながっている」、「ボールを受け取ったらすぐに投げる」、「相手がどんな人が想像しながらプレイする」という教示を行った。

(5) **サイバースポーツ課題の練習課題**：投球回数を5回に短縮し、実験参加者にボールが回る確率を70%に設定した練習課題を行った。

(6) **サイバースポーツ課題の本課題**：各試行で投球回数45回の本課題を行った。実験参加者にボールが回る確率は各試行別に設定した。各試行前に、実験上の虚偽の手続きとして、別室の実験者から実験の準備が完了した旨の電話を受信する振りを見せた。

(7) **質問紙尺度への回答**：被拒絶感、拒絶知覚、拒絶予期への回答を求めた。

(8) **ディブリーフィング**：別室に他の実験参加者が待機していることや、別室からの電話は虚偽だったことを伝え、実験参加者の健康状態や疑問点を確認した。

(9) **謝礼の受け渡し**：図書カードにて謝礼を支払った。

分析方法

分析には、SPSS version24 (IBM, New York, USA)を使用した。各変数は連続変数であること、また、拒絶過敏性はパーソナリティ特性であるため群分けの基準値がないことから、群間比較は行わないこととした。

(1) **対象者の選定**：巢山(2016)を参考に、第3試行での被拒絶感に1と回答した者を、課題内の被拒絶場面において被拒絶感を感じていないと判断し、分析対象から除外した。

(2) **相関分析**：実験参加者ごとの各変数間の関連を検討するために、Spearmanの順位相関分析を行った。

操作チェック

先行研究(巢山, 2016)において作成され、被拒絶場面の呈示における妥当性が確認された課題が、本研究でも再現できているか確認するために、先行研究(巢山, 2016)で得られた結果と同様の結果が得られるかを確認する。第3試行における拒絶知覚と第3試行後の拒絶予期との間に正の相関が示される。また、J-IPSMと第3試行後の拒絶予期との間に負の相関が示される。

仮説

- (1) RRQ, PBRs および NBDRQ と、被拒絶場面である第3試行後、拒絶体験後の試行である第4試行後、第5試行後の拒絶予期との間にそれぞれ負の相関が示される。
- (2) RRQ, PBRs および NBDRQ と、第3, 4, 5試行における拒絶知覚との間にそれぞれ負の相関が示される。

倫理的配慮

実験参加者には、本研究への参加は任意であり、実験の不参加や中断によって、実験参加者に不利益は一切生じないこと、実験参加に際して取得した個人情報 は厳重に管理することをあらかじめ伝えた。

なお、本研究は、「早稲田大学人を対象とする研究に関する倫理審査委員会」の承認を得て行われた(承認番号: 2019-134)。

結 果

記述統計量

第3試行での被拒絶感に1と回答した者はいなかったため、最終的な分析対象を21名(男性7名, 女性13名, 無回答1名, 平均年齢 20.38 ± 1.72 歳)とした。

回答を求めた質問紙尺度の平均値と標準偏差を Table 1 に示す。

Table 1
記述統計量 ($N=21$)

変数名	最小値	最大値	平均値	標準偏差
RRQ	22	54	41.67	8.47
J-IPSM	28	53	38.90	7.73
PBRs	14	36	25.86	4.78
NBDRQ	18	71	44.90	13.92
拒絶知覚(第1試行)	15	60	29.00	10.07
拒絶知覚(第2試行)	5	35	18.95	7.87
拒絶知覚(第3試行)	3	20	9.81	4.61
拒絶知覚(第4試行)	3	35	19.95	8.25
拒絶知覚(第5試行)	15	80	39.52	14.99
拒絶予期(第1試行)	20	40	30.00	5.45
拒絶予期(第2試行)	10	40	22.33	9.52
拒絶予期(第3試行)	1	25	11.00	7.24
拒絶予期(第4試行)	0	40	21.33	9.29
拒絶予期(第5試行)	15	55	31.14	8.24
被拒絶感(第1試行)	1	8	3.71	2.35
被拒絶感(第2試行)	2	8	5.62	1.72
被拒絶感(第3試行)	2	9	6.90	2.12
被拒絶感(第4試行)	3	8	5.14	1.71
被拒絶感(第5試行)	1	7	3.24	1.76

Note. RRQ; Rumination-Reflection Questionnaire, J-IPSM; Interpersonal Sensitivity Measure, PBRs; Positive Beliefs about Rumination Scale, NBDRQ; Negative Beliefs about Depression Rumination Questionnaire.

相関分析

実験参加者の各変数間の関連を検討するために、Spearman の順位相関分析を行った。結果をそれぞれ Table 2, 3, 4 に示す。

操作チェックに関しては、第3試行における拒絶知覚と、第3試行後の拒絶予期との間に有意な中程度の正の相関が示された ($r = .61, p < .01$)。また、第3試行後の拒絶予期と、J-IPSM との間に有意な中程度の負の

相関が示された ($r = -.44, p < .05$)。

仮説 (1) に関しては、第4試行後の拒絶予期と RRQ との間に有意傾向の弱い負の相関が、PBRs との間に有意な中程度の負の相関が示された ($r = -.37, p < .10$; $r = -.48, p < .05$)。また、拒絶予期と NBDRQ との間に有意な相関はみられなかった。

仮説 (2) に関しては、拒絶知覚と RRQ, PBRs および NBDRQ との間に有意な相関はみられなかった。

Table 2

課題前に測定した各変数における Spearman の順位相関係数 ($N = 21$)

	RRQ	J-IPSM	PBRs
RRQ	-		
J-IPSM	.61**	-	
PBRs	.59**	.36	-
NBDRQ	.39 [†]	.46*	-.03

Note. RRQ; Rumination-Reflection Questionnaire, J-IPSM; Interpersonal Sensitivity Measure, PBRs; Positive Beliefs about Rumination Scale, NBDRQ; Negative Beliefs about Depression Rumination Questionnaire.

** $p < .01$ * $p < .05$ [†] $p < .10$

Table 3

各変数における Spearman の順位相関係数 ($N = 21$)

	RRQ	J-IPSM	PBRs	NBDRQ
拒絶知覚 (第1試行)	-.11	-.07	.32	-.08
拒絶予期 (第1試行)	-.40 [†]	-.38 [†]	-.22	-.37 [†]
拒絶知覚 (第2試行)	-.24	-.40 [†]	-.28	.15
拒絶予期 (第2試行)	-.04	.17	.04	-.18
拒絶知覚 (第3試行)	-.11	-.35	-.03	-.24
拒絶予期 (第3試行)	-.18	-.44*	-.29	-.15
拒絶知覚 (第4試行)	-.17	-.14	-.26	-.05
拒絶予期 (第4試行)	-.37 [†]	-.34	-.48*	-.11
拒絶知覚 (第5試行)	.28	.29	.02	-.17
拒絶予期 (第5試行)	.17	-.03	-.03	-.10

Note. RRQ; Rumination-Reflection Questionnaire, J-IPSM; Interpersonal Sensitivity Measure, PBRs; Positive Beliefs about Rumination Scale, NBDRQ; Negative Beliefs about Depression Rumination Questionnaire.

** $p < .01$ * $p < .05$ [†] $p < .10$

Table 4
 課題中に測定した各変数における Spearman の順位相関係数 ($N=21$)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
1) 拒絶知覚 (第1試行)	-									
2) 拒絶予期 (第1試行)	.40 [†]	-								
3) 拒絶知覚 (第2試行)	.19	.35	-							
4) 拒絶予期 (第2試行)	.32	.45 [†]	.25	-						
5) 拒絶知覚 (第3試行)	-.17	.17	.23	-.08	-					
6) 拒絶予期 (第3試行)	-.17	.28	.37	.25	.61 ^{**}	-				
7) 拒絶知覚 (第4試行)	.19	.21	.34	.29	.28	.46 [*]	-			
8) 拒絶予期 (第4試行)	-.02	.46 [*]	.32	.03	.29	.55 ^{**}	.68 ^{**}	-		
9) 拒絶知覚 (第5試行)	.18	.14	-.22	.17	-.37	-.08	.13	.22	-	
10) 拒絶予期 (第5試行)	.13	.15	.15	-.05	.01	.18	.30	.49 [*]	.55 [*]	-

** $p < .01$ * $p < .05$ † $p < .10$

考 察

本研究の目的は、反芻と被拒絶場面における拒絶予期および拒絶知覚の関連について検討することであった。

各変数間の関連を検討した結果、第3試行における拒絶知覚と、第3試行後の拒絶予期との間に有意な中程度の正の相関が示された。また、J-IPSMと第3試行後の拒絶予期との間に有意な中程度の負の相関が示された。このことから、被拒絶場面後の拒絶知覚がその後の状況における拒絶予期に影響することや、拒絶過敏性が高い者は、被拒絶場面後に拒絶予期が高まるといふ先行研究の結果が、本研究でも確認された(巢山, 2016)。

次に、第4試行後の拒絶予期とRRQとの間に有意傾向で弱い負の相関が、PBRQとの間に有意な中程度の負の相関が示された。一方で、拒絶予期とNBDRQとの間に有意な相関はみられなかった。したがって、仮説(1)は一部のみ支持された。第4試行は、実験参加者にボールが回る確率が、明確な被拒絶場面である第3試行から上がり、拒絶知覚と拒絶予期の平均値も第2試行と同じレベルまで回復するが、その確率はプログラム上の2人のプレイヤーと均等ではなく、第3試行の被拒絶場面を体験した後であるため、曖昧な被拒絶場面として経験されている可能性がある。したがって、第4試行後の拒絶予期とRRQおよびPBRQとの間に負の相関が示されたことから、被拒絶場面の体験が蓄積した状況において、反芻や反芻に対するポジティブなメタ認知的信念が高い者ほど、曖昧な被拒絶場面の後、次に発生する拒絶の程度を高く見積もっていることが示唆された。このことから、拒絶を予期する過程には、過去についての反復的思考である反芻が関連している可能性が考えられる。また、反芻に対するポジティブなメタ認知的信念は脅威的なサインをモニタリングすることと関わっており、反芻に対するネガティ

ブなメタ認知的信念は反芻の制御不能性に関わっているとされている(Wells, 2009 熊野他監訳, 2012)。このことから、拒絶予期とNBDRQとの間に有意な相関がみられなかったことについては、曖昧な被拒絶場面の後、拒絶予期が生起する際には、反芻が制御不能に陥るのではなく、拒絶される危険性をモニタリングするために、能動的に反芻が行なわれている可能性が考えられる。また、被拒絶場面である第3試行後の拒絶予期と反芻との間に関連が示されなかったことについては、明確な拒絶よりも曖昧な拒絶の方が、自身に原因を帰属しやすく、過去の拒絶に対する接近可能性が高まるといふ知見や(遠藤, 2006)、有害な内省を促しやすいといふ知見を支持するものと考えられる(Williams, Cheung, & Choi, 2000)。また、第5試行は実験参加者にボールが均等に回ってくるため、実験参加者が受容されていると感じやすい試行である。このことから、拒絶される可能性を認識していない状況では、拒絶予期が起こらなかった可能性が考えられる。

次に、拒絶知覚とRRQ, PBRQおよびNBDRQとの間にはいずれも有意な相関が示されなかった。したがって、仮説(2)は支持されなかった。本研究においては、拒絶知覚によって反芻が直接的に高められると想定していたが、拒絶予期は拒絶知覚に正の影響を与えることが示されていることから(巢山, 2016)、反芻によって曖昧な被拒絶場面における拒絶予期が高まったことにより、次の被拒絶場面における拒絶知覚が間接的に高められている可能性が考えられる。すなわち、拒絶予期が拒絶知覚に直接的な影響を及ぼすことと同時に、被拒絶場面が曖昧なものであった場合は、反芻のしやすさによって拒絶予期が高まることで、拒絶知覚も高められる可能性が考えられる。

本研究の結果から、反芻しやすい者ほど、被拒絶場面の体験が蓄積した状況において、曖昧な被拒絶場面後に拒絶に対する予期が高まる可能性が考えられる。したがって、MCTでの介入によって、反芻や反芻を高

める信念である反芻に対するポジティブなメタ認知的信念を低減させることで、拒絶に対する予期を減弱させることが有効である可能性が考えられる。

最後に、本研究の限界点を示す。本研究の限界点として、以下の2点が挙げられる。

1点目は、サンプルサイズが少ない点である。本研究は、サンプルサイズが21人と少なかつたため、検定力が不足していることは否めない。今後は対象者数を増やし、本研究の結果を再検討する必要がある。

2点目は、課題中に喚起された反芻を測定していない点である。本研究においては、反芻傾向の高さが課題中の反芻のしやすさを反映すると仮定したが、課題中に実際に反芻がどの程度活性化されたかは測定していない。反芻に対するMCTでのアプローチによる、被拒絶場面における循環プロセスへの介入可能性を示すためには、反芻が被拒絶場面における拒絶予期に影響を与えていることを、反芻を操作することによって検討する必要があると考えられる。また、拒絶知覚との関連を検討するためには、被拒絶場面において拒絶を知覚し、それによって反芻が高められたかどうかを検討する必要がある。

参考文献

- Ayduk, O., Downey, G., & Kim, M. (2001). Rejection sensitivity and depressive symptoms in women. *Personality and Social Psychology Bulletin*, *27*, 868-877.
- Downey, G., & Feldman, S. I. (1996). Implications of rejection sensitivity for intimate relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, *70*, 1327-1343.
- 遠藤 由実 (2006). 自尊感情が社会的排除・拒絶への反応に及ぼす効果 関西大学社会学部紀要, *37*, 29-41.
- Gao, S., Assink, M., Cipriani, A., & Lin, K. (2017). Associations between rejection sensitivity and mental health outcomes: A meta-analytic review. *Clinical Psychology Review*, *57*, 59-74.
- 長谷川 晃・金築 優・井合 真海子・根建 金男 (2011). 抑うつ的反すうに関するネガティブな信念と抑うつとの関連性 行動医学研究, *17*, 16-24.
- Kawamoto, T., Onoda, K., Nakashima, K., Nittono, H., Yamaguchi, S., & Ura, M. (2012). Is dorsal anterior cingulate cortex activation in response to social exclusion due to expectancy violation? An fMRI study. *Frontiers in Evolutionary Neuroscience*, *4* (11), 1-10.
- 熊野 宏昭 (2012). 新世代の認知行動療法 日本評論社
- Levy, S. R., Ayduk, O., & Downey, G. (2001). The role of rejection sensitivity in people's relationships with significant others and valued social groups. In M. R. Leary (Ed.), *Interpersonal rejection* (pp.251-290). New York: Oxford University Press.
- Normansell, K. M., & Wisco, B. E. (2017). Negative interpretation bias as a mechanism of the relationship between rejection sensitivity and depressive symptoms. *Cognition and Emotion*, *31*, 950-962.
- 岡田 涼・中山 留美子 (2008). 対人的拒絶研究の概観—実験社会心理学領域を中心に—名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学, *55*, 27-45.
- Pearson, K. A., Watkins, E. R., Mullan, E. G. (2011). Rejection sensitivity prospectively predicts increased rumination. *Behaviour Research and Therapy*, *49*, 597-605.
- 巢山 晴菜 (2016). 拒絶過敏性の認知行動的特徴と抑うつ気分への影響 早稲田大学人間科学研究科博士論文
- 巢山 晴菜・貝谷 久宣・小川 祐子・小関 俊祐・小関 真実・兼子 唯・鈴木 伸一 (2014). 本邦における拒絶に対する過敏性の特徴の検討—非定型うつ病における所見— 心神医学学会, *54*, 422-430.
- 高野 慶輔・丹野 義彦 (2008). Rumination-Reflection Questionnaire 日本語版作成の試み パーソナリティ研究, *16*, 259-261.
- 高野 慶輔・丹野 義彦 (2010). 反芻に対する肯定的信念と反芻・省察 日本パーソナリティ心理学会, *19*, 15-24.
- Wells, A. (2009). *Metacognitive therapy for anxiety and depression*. New York: The Guildford Press.
- (ウエルズ, A. 熊野 宏昭・今井 正司・境 泉洋 (監訳) (2012). メタ認知療法—うつと不安の新しいケースフォーミュレーション— 日本評論社)
- Williams, K. D., Cheung, C. K., & Choi, W. (2000). Cyberostracism: effects of being ignored over the Internet. *Journal of personality and social psychology*, *79*, 748-762.